

## 『今』を生きよう⑬最終回 「神の食卓」 出エジプト記 24:1-11

わたしたちは「主の計画を信頼して『今』を生きよう」という今年度の年間標語を心にとめつつ、シリーズで聖書の御言葉を分かち合ってきました。イスラエルの民が荒野という厳しい環境の中で主の民として歩んだ姿からコロナ危機に生きるわたしたちへの主のメッセージを受けてきたのです。今日はそのシリーズの最終回として、イスラエルの民がシナイ山で主と契約を結ぶ場面に注目してみたいと思います。この契約を第3部に分けて分かち合いつつ、そこからキリストの福音に触れていきたいと思ひます。

**契約の第1部：3つの区別から（1-3節）**

第1部は本契約の前日に行われました。主はイスラエルの民を3つのグループに分けてそれぞれが立つ場所を指定してくださいました。まず一般の民は山に登ることが許されず、山の下に集まっていました。次に、祭司長のアロンとその息子のナダブとアビフ、そして民全体を代表する70人の長老たちは山の中腹まで、そしてモーセだけが主に近づくことができました。そこでモーセは10の神の言葉（20章）と法（21-23章）を民の前で読み聞かせると、民は皆声を一つにして答えました。「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います。」（3節）そして、モーセはその言葉は書き記して契約の書を作りました。

この後、イスラエルの民は主に命じられ、礼拝の場所として幕屋を建てるようになりますが、その幕屋の構造も3つに分けられています。まず、民は皆幕屋の庭に入ることができますが、幕屋の建物に入ることは祭司長にしか許されず、幕屋の奥にある至聖所は普段モーセにしか許されない領域です。この構造はわたしたちが神さまに近づくためには、神によって立てられた執り成し役の存在が必要であることを教えてくれます。わたしたちのためにだれがモーセや祭司長のように神とわたしたちの間で働いてくれるのでしょうか。「わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。」（ヘブライ 4:14）イエス・キリストによりわたしたちはどんなときでも神に近づき、神に礼拝をささげることができるのです。

**契約の第2部：血の契約（4-8節）**

主とイスラエルの民との本契約は、12部族を象徴する12の石の柱を建てることから始まりました。そして、二つの献げ物をささげることによって血による契約を結びました。一つは神さまと民との関係を結ぶために動物のすべてを焼き尽くす献げ物で、もう一つは一部を焼き尽くして神にささげ、一部は民が分けて食べる和解の献げ物でした。モーセはそのときに流された血を取って、半分を祭壇に振りかけました。それから、契約の書を民に読み聞かせると、民は皆声を一つにして答えました。「わたしたちは、主が語られたことをすべて行い、守ります」（7節）その告白の上にモーセは残りの半分の血を民に振りかけて言いました。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」（8節）

動物の血を祭壇と民に振りかけることはどういう意味があるのでしょうか。古代の契約

文化からみますと、もし契約を破ったらこのように血を流さなければならないという警告の意味があります。また、血を分け合った関係、血縁関係のように深い関係になったことをも意味します。この血の契約を通して正式に主はイスラエルの神となり、イスラエルは神の民となったのです。しかし、このような契約を結んだにもかかわらず、これからイスラエルの民は神の言葉を守らず、契約を破っていきます。その結果、約 800 年以上過ぎたとき、主は預言者エレミヤの口を通してイスラエルの民にこう言われました。「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る…わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った…」(エレミヤ 31:31-32) シナイ山の契約はそのように終わり、神はイエス・キリストを通して新しい契約、血による契約を備えてくださいました。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」(ルカ 22:20)

血の契約はわたしたちがキリストを通して神さまとどのような契約を結んだのかを明確に見せてくれます。わたしたちはキリストの血を通して神さまと血縁関係のような関係、すなわち、神の養子になりました。しかし、キリストの血による新しい契約はシナイ山の契約と異なり、主は契約の書ではなく、聖霊を通してわたしたちの心に主の言葉を記してください、神の子として歩めるように助けてくださいます。いつまでも神の子として歩めるように導いてくださるのです。

### 契約の第3部：神の食卓（9-11節）

その後、モーセとアロン、ナダブ、アビフ、そして70人の長老たちは再び山に登りました。主と契約を結んだイスラエルの代表として神の食卓に招かれたからです。彼らは神の御前で神を見ながら、神と共に晩餐のときを持ちました。血の契約によって深い関係を結んだことを確立するための晩餐だったのです。きっと主の前で緊張感をもっていたと思いますが、今まで体験したことのない大きな愛と喜びに包まれていたでしょう。10節の主の足の描写から考えてみますと、その食卓は天上の食卓のようなものだったと思います。

今までわたしたちはイスラエルの契約を通してイエス・キリストを改めて思い起こすことができました。わたしたちは罪ある者で主に近づくことが許されません。しかし、キリストの十字架の血によって3つの区別を超えて神の食卓に座り、主の見ながら食べ、また飲むことができるのです。山の下、幕屋の庭にとどまることは主が望まれることではありません。わたしたちはキリストの血の契約を信じ、神の子として感謝と喜びをもって大胆に神の食卓に座りたいのです。

「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ 22:19) というイエスさまの命令により、初代教会は最初から「家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美し」(使徒 2:46-47)つつ、信仰を守りました。集まって食べて賛美をささげることが礼拝の中心だったのです。しかし、キリスト教会は様々な文化や思想の影響を受けながら、晩餐から食事を取り除き、儀式だけを行うようになり、宗教改革を通して月1回か年に4回行えばよいものになってしまったのです。さらにコロナ危機の中、わたしたちは毎月1回行っていた主の晩餐さえも失ってしまいました。神の食卓の恵みを受けつづけるために今、わたしたちにできることは何かを共に祈りたいと願います。